戦後８０年を日中戦争から考える
講演と芝居のつどい

戦後80年の節目の年、この間、日本がNOWARで過ごせたのは日本国憲法の存在、日中友好協会や平和、民主勢力による反戦平和の運動があったからにほかなりません。しかし昨今、安保体制下で軍備拡大を主張する陣営は、ロシアによるウクライナ侵略にかこつけ、『台湾有事』の危険性を誇大宣伝し、中国からの侵略に備える必要を主張し始めています。

講演は「『戦争』の終わらせ方」の著作がある、原田敬一佛教大学名誉教授。劇は吹田を拠点に活動する劇団EN（えん）による二人芝居「りゅうりぇんれんの物語」です。平和を考えるつどいにぜひお越しください。

日時　**2025年9月15日（月・祝）**

13：30～16：00　開場13：00

会場　**国労大阪会館** 大会議室

（JR天満駅下車） （地図参照）

（第１部）劇団ＥＮ　公演

二人芝居「りゅうりぇんれんの物語」

日中戦争末期、中国から石狩の炭坑へ強制連行され、昭和20年7月に脱走。14年間北海道の山野を生き抜いた「りゅうりぇんれんの物語。」

作　茨木のりこ　　演出　宮村信吾

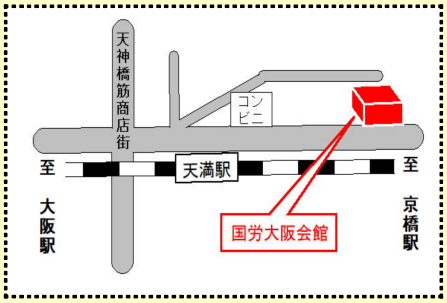
出演　　南澤あつ子　宮村信吾

音響オペレーター　　青木和男

（第２部）講演

「日中戦争」と「中日戦争」から考える

講師　原田敬一氏（佛教大学名誉教授）



JR天満駅下車、京橋方面へ180m

資料代　1,000円

劇団EN

原田敬一　氏

戦争の始まりを知らされなければ、終わりも見えることはない。私たちは、歴史の事実から出発し、戦争というものの無謀さを知らなければならない。戦争は無謀で悲惨だから起こしてはいけないというだけではない。

数々の外交問題を、一挙に解決するための戦争はありえない。戦争は何も解決しない。「テロとの戦争」を宣言したアメリカも、その終結を見出せない。

「敵」をつくり、認定し、それとの戦いに力を尽くす、そういう国では戦争はなくならない。「敵」との「正戦」「聖戦」は五〇年戦争を続けていた日本の考えだった。それと決別する世界への宣言が日本国憲法であり、とりわけその前文と第九条である。いまだ実現されていない世界の平和へ向かう指針である。

（「『戦争』の終わらせ方」エピローグより）

主催・問合先：日中友好協会大阪府連合会　06-6372-8131　info@jcfaosaka.org

劇団ENの紹介とアピール

2009年　宮村信吾・南澤あつ子により、「人間の尊厳。平和への希求。そして子どもたちの明るい未来のために」をテーマに願い創立。大阪市内は勿論依頼があれば各地で公演しています。特に吹田の「子どもたちの未来と平和を語る集い」（戦争展）には、10年以上毎年参加し、地域の子どもたちへ、創造することの大切さを伝えています。

広島の原爆を描いた「コスモス」や、別役実の「なにもないねこ」は子ども達だけではなく、大人からも、年齢に関わらず楽しめると絶賛（支持）をいただいています。

特にこの数年は、100年前の関東大震災時の日本人による大虐殺を描いた「証言集を読む―百年前何が起こったか」、日中戦争に従軍した兵士が戦争で犯した罪を綴った手記「父が中国で送った暗黒の青春」を、どちらも宮村が脚本化し語り芝居で上演。新聞にも取り上げられました。

9月15日は、茨木のり子氏の詩「りゅうりぇんれんの物語」を上演。この3部作を通して、たくさんの方に日本の加害責任からも戦争について考えるきっかけにしてもらいと思っています。

各地での上演機会がありますよう是非皆様のご協力をお願いします。

講師紹介と講演要旨

プロフィール:（はらだ　けいいち）　1948年生まれ、佛教大学名誉教授。専門は日本近現代史・都市史・軍事史。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了、博士（文学）。

主著:「兵士はどこへ行った―軍用墓地と国民国家－」（有志舎）、「『戦争』の終わらせ方」（新日本出版社）、「日清・日露戦争」（岩波新書）など多数。

日本最初の侵略戦争は、日清戦争から

日中の戦争認識には大きな溝がある。日中戦争が日本最初の侵略戦争ではなく、日清戦争から始まっている。明治維新以来日本はアジア侵略を開始した、という立場を私はとらないが、日清戦争中から日本は大陸進出を利益とする政治を進めて来た。日清戦争の終わらせ方は、日本の以後の侵略を可能にする形にしている。それが第一次世界大戦の火事場泥棒的な、対華21カ条要求となり、中国の反感を強めた。日清戦争以来の日本の経済的中国進出は、中国の反発を強め、日貨ボイコット運動が繰り返されている。日本では、外交手段で対処すべき案件が、しだいに軍事的対応を当然とし、外交手段を駆使する中国との乖離が進んだ。関東軍から陸軍、さらに海軍へと広がった対中国強硬派の流れは、外務省にも生まれ、それが中国との戦争の解決をいっそう困難にした。

世界の戦争違法化の流れに背く

第一次世界大戦後の戦争違法化の世界の流れに最初に背いたのは、日本だった。1931年の柳条湖事件以前に、1927年から1928年に「山東出兵」という大規模派兵を行っている。国際連盟常任理事国日本の単独軍事行動は、世界を驚かせたが、日本政府は東方会議で、対中国強硬策を採用する。15年戦争ではなく、1927年から1945年の18年戦争ともいえる。日清戦争以来の日本の海外派兵や植民地拡大と軍隊駐屯、それらはアジアを蔑視することで可能になった。アジア蔑視が、戦争は利益を生むという国民意識の底層にある。

間違った歴史認識がアジア蔑視を残存させ、今につながる

大多数の日本人の歴史認識は、「8年間の日中戦争とは別に英米と戦い原爆に負けた日本。一級の軍事力を持ちながら原爆という超兵器に負けた日本。戦後は科学立国で高度経済成長を成し遂げ再び大国の道を歩んだ日本。」というものではないだろうか。この認識は間違っているし、この認識が、アジア蔑視を残存させ、それが在特会などの排外主義へと成長させた。参政党の排外主義が、原爆肯定や日中戦争聖戦論まで述べているように、戦後日本の歴史認識の最大の問題は、中国や朝鮮など東アジアへの蔑視感が基礎となっていること。この問題を、戦後80年の節目の年にみなさんといっしょに考えましょう。